

【9】螺髻梵志の修行形態

[0] 次に修行形態を調査する。

[1] 彼らの修行は「苦行」と称される部類に属するものであったようである。

[1-1] 原始聖典には〈8〉〈21〉に言及されている。

[1-2] 後期聖典資料には次のようなものがある。〈1〉〈2〉〈3〉〈6〉〈8〉〈10〉〈11〉〈12〉〈13〉〈14〉〈15〉〈19〉〈20〉〈23〉〈24〉〈25〉〈30〉〈31〉〈34〉〈39〉〈46〉である。

[1-3] 以上は「苦行 (tapa)」という語句が含まれる資料を紹介した。この「苦行」の中身については以下を参照されたい。

[2] 螺髻梵志は火を祀っていたと考えられる。

[2-1] 三迦葉に係る記述はすでに紹介した。

[2-2] 原始聖典資料〈1〉は「事火する螺髻梵志の草庵 (aggikassa jaṭilassa assamassa)」といい、〈3〉は「事火編髮梵志」という。螺髻梵志＝事火という認識が持たれていたものと考えられる。

しかし「受戒韃度」に、外道の出家希望者には4ヶ月の別住を与えると定められたときの、その除外規定では次のように表現されている。〈25〉は「火教徒・螺髻にした者ら (aggikā jaṭilā) が来たならば具足戒を授けるべし、別住を与えてはならない。彼らは業を説き、所作を説くからである (ete kammavādino kiriyavādino)」とし、火教徒は螺髻梵志を意味するのか、火教徒と螺髻梵志は異なるのか判然としない。ちなみに『善見律毘婆沙』(大正24 p.789下)は「応更與四月。若結髮外道事火外道。不須波利婆沙。何以故。此二外道有業信因果」とし、『根本有部律』「出家事」(大正23 p.1032上)は「若有事火外道来求出家、応与彼度及授近圓。何以故。此事火種類信三種業。何等為三。所謂有業及所作業与作因業。是故応度」とする。

[2-3] その他の螺髻梵志が火を祀っていたことを示す原始聖典資料を紹介しておく。

〈22〉〈26〉はケーニヤに関するものであるが、釈尊は彼に対して「火を祀るのは供犠の最高であり (aggihuttamukhā yaññā)、……サンガは供養する人々の最高である」という偈を唱えられたとされている。また〈19〉は象頭山での事績とされるから、三迦葉とその弟子たちと思われる1000人の弟子に対する記述と思われるが、彼らは火神の祭を執り行つて (aggim juhanti)、「これで清浄だ (iminā suddhī)」と思っていた、とされる。

〈7〉のSN.007-001～006には螺髻のバーラドヴァージャ・バラモン (jaṭā-bhāradvāja brāhmaṇa) が登場し、第8経には拜火のバーラドヴァージャ・バラモン (aggika-bhāradvāja brāhmaṇa) が登場して「供火を行い、拜火供犠を行おうとしている (aggim juhissāmi aggihuttaṃ paricarissāmi)」。また第9経のスンドリカ・バーラドヴァージャ・バラモン (sundarika-bhāradvāja brāhmaṇa) は「スンドリカ河畔で (Sundarikāya nadiyā tīre)、供火を行い、拜火供犠を行った (aggim juhati aggihuttaṃ paricarati)」とされる。螺髻のバーラドヴァージャ・バラモンが火を祀っていたとはしないが、一連の文章からする

と、彼も行ったと推測するのは無理ではあるまい。

〈21〉はバラモンの行う無駄な主要徳目を羅列したものであるが、そのなかに「火への供養 (aggihuttassa upasevanā)」が含まれている。

なおこれは必ずしも螺髻梵志と特定されているわけではないが、火を祀る苦行者がいたことが記されている。

或有沙門梵志裸形無衣。……或有事火。竟昔然之。『中阿含』18「師子經」(大正01 p.442 上)

或有沙門梵志裸形無衣。……或有事火竟昔然之。『中阿含』104「優曇婆羅經」(大正01 p.592 中)

或有沙門梵志。裸形無衣。……或有事火竟昔燃之。『中阿含』174「受法經」(大正01 p.712 中)

[2-4] 後期聖典には次のような資料がある。〈25〉〈26〉〈34〉〈46〉である。

[2-5] 以上のように螺髻梵志は火を祀っていた。これは日常的に行う「供犠」であろう。先に述べたように螺髻梵志とは別に事火外道と呼ばれる宗教者がいた可能性もないではないが、具体的にはそのような特定の宗教者は知られないから、ここでは事火外道＝螺髻梵志と解釈しておく。

[3] 螺髻梵志には沐浴が宗教的に意味あるものとして位置づけられ、実行されていたようである。

[3-1] 三迦葉についてはすでに述べた。

[3-2] 原始聖典資料には次のようなものがある。〈8〉は「早朝の水浴 (pātho sinānaṃ)」、〈9〉は「三浴」、〈17〉は「沐浴」といい、いずれもバラモンの無意味な修行徳目の一つとして挙げられたものである。〈19〉は三迦葉と1000人の弟子について述べたものと推測されるが、「冬の (hemantika) 夜、月の第八日の前後 (antaraṭṭhaka) に、あるいは沈み (nimujjante)、あるいは水を注いだりして (osiñcante)、これで清浄だ (iminā suddhi) と思っていた」とする。

[3-3] 後期聖典にも見いだされる。〈1〉は「朝夕に沐浴して清らかとなることを喜び (udakarohakā keci sāyaṃ pāto suciratā)」とし、〈30〉は「潜水の行 (udakogāhanakammaṃ karotha)」をしていたとし、〈46〉は「沐浴した (nahāyati)」とする。〈48〉は、原始聖典資料の〈8〉〈9〉〈17〉と同じ趣意のものである。

[3-4] 以上に見られるように、螺髻梵志たちは修行の一環として沐浴を行っていた。早朝、朝夕、あるいは1日に3度(三浴)なされた。また冬の寒い日にもなされた。

[4] 螺髻梵志たちは供犠 (yañña, Skt.; yajña) を行っていた。

[4-1] 三迦葉が大規模な供犠を行ったことについてはすでに述べた。

[4-2] この供犠は犠牲を捧げるものであったかも知れない。

SN.001-004-002 (vol. I p.019) では、釈尊の「落ち穂を拾って生活し (samuñchakaṃ care)、妻を養う者 (dāram posaṃ) も乏しき中から施す者は法を行う者であり、千の供犠を行う者 (sahassayāgin) の百千の供犠もこのような者の百分の一に値しない」という句に

対する神 (devatā) のなぜかという質問に、傷つけ (chindati)、殺し (vadhatu)、悲しませる (socayati) 施しは正しくない (visama) からだと、答えている。はっきりと螺髻梵志の供犠と特定されているわけではないが、先に述べたように、「落ち穂を拾って生活」するのは螺髻梵志の望まれる生活形態であったから、したがってここで言及されている供犠 (yañña) は螺髻梵志の行う犠牲と解釈されうる。もしこの解釈が許されるならこの供犠は犠牲を伴うものであったことになる。

[4-3] 螺髻梵志と特定されてはいないが、原始仏教聖典には犠牲獣を供える供犠が行われていたことが知られる。SN.003-001-009 (vol. I p.075) や『雑阿含』1234 (大正 02 p.338 上) は、そのときパセーナディ王は供犠のために多数の生贄を準備していた。早朝、多数の比丘たちが城内で托鉢した後、釈尊のもとにやって来てこれを告げた。釈尊は「馬、人などの供犠は、労すること多くして大果なし。殺されることのない供犠を行なえ。これには大果がある」という偈を唱えられた。

また、AN.007-005-044 (vol. IV p.041) は、そのときウッタサリラという婆羅門が大供犠の為に 500 頭の牡牛、子牛、牡山羊、牡羊と祭壇の柱を準備した。ときに彼は釈尊のもとにやって来て、「供犠のため、私は火を点じ、柱を建てたいが、大果があるだろうか」と質問した。釈尊は「供犠の為に犠牲獣を殺そうとして、火を点じ、柱を建てつつ、不善をなして、苦を異熟する 3 つの刀 (意と語と身) を建てることになる。それ故に、貪欲と瞋恚と愚癡という 3 つの火は断つて用いるべきではない。むしろ応請火 (父母) と長者火 (息子・妻・奴僕・召使い) と応施火 (驕放逸を離れて、独り自らを調御し、般涅槃させること) という 3 つの火を尊敬尊重し、供養するなら、貪火と瞋火と癡火の 3 つの火は正しく容易に断たれるであろう。この薪の火は常に燃え上がらせるべきである」と説かれる。彼はこの教えを聞いて優婆塞となり、準備した犠牲獣を解放したとされている。

さらに、AN.004-004-039 (vol. II p.042) には、称賛しない供犠 (yañña) と称賛する供犠があるとし、称賛しない供犠は、供犠するときに牛を殺し、山羊・羊を殺し、鶏・豚を殺し、他の有情を殺す供犠であり、称賛する供犠はそれらを殺さない供犠であるとする。また劬勞を伴う祀と伴わない祀 (供犠) があるとされる。

[4-4] 後期聖典の記述からもそれが知られる。資料〈31〉は「供犠を行おうとして (yaññaṃ yajāpetvā)、吉祥なる象の首を刎ねよう (maṅgala-hatthiṃ gīvāya paharissāmi) としたとき、その叫び声を聞いて馬や牛が恐怖の叫びを挙げたので後悔した」とされる。

また資料〈34〉の偈中の「祭柱 (yūpa)」は犠牲獣を捧げる柱と考えられる。

[4-5] 以上のように螺髻梵志は日常的な火を祀る「供犠」のほかに、大規模な「供犠」も行い、この際には犠牲獣が供されることがあったものと考えられる。

[5] 螺髻梵志はヴェーダや真言を誦した。

[5-1] 原始聖典には次のよう資料がある。前項にも掲げたバラモンの無意味な修行徳目を掲げる〈8〉には「三ヴェーダの読誦 (tayo vedā)」、〈9〉には「誦三典」が掲げられる。

[5-2] 後期聖典には次のようなものがある。〈7〉には「真言 (manta) や六支 (chalanṅga) や相 (lakkhaṇa) を学ぼうとした」、〈9〉には「(ヴェーダの) 読誦者 (ajjhāyaka)

であり、真言を持し (mantadhara)、三ヴェーダに通じ (tiṅṅaṃ vedānaṃpāragū) ていた」、〈30〉は「聖典の読誦 (mante sajjhāyatha)」「真言を誦す (japati)」とし、〈34〉も「真言を誦す (japanti)」とする。

‘japati’ ‘sajjhāyati’ がヴェーダやバラモンの呪を誦すことを意味するかどうかは問題であるが、後に紹介するように「法典」ではその意味に使われている。

[5-3] しかし螺髻梵志がバラモンの修行者であったとすると、ヴェーダや真言が誦されたことは当然であるというべきであろう。

[6] 螺髻梵志は蹲踞したり、立ったままで坐らなかつたり、棘の床に伏したりする修行も行っていたようである。

[6-1] 原始聖典から蹲踞の用例を掲げる。バラモンの無意味な修行として、〈15〉は「蹲踞 (ukkuṭīkappadhānaṃ)」、〈17〉は「踞石」を挙げ、後期聖典資料の〈48〉も同じような趣旨で「蹲踞」を挙げる。

[6-2] 後期聖典については次のような資料がある。〈30〉は「蹲踞の行 (ukkuṭīkappadhānaṃ anuyuñjatha)」といい、〈34〉は「蹲踞し (ukkuṭīkappadhāna)、棘の床に伏す (kaṇṭhakaṇṭhāyika)」という。

[6-3] 原始聖典には「苦行」の中に次のような項目が挙げられている。ただし螺髻梵志に特定されているわけではない。

或有沙門梵志裸形無衣。……或住立斷坐或修蹲行或有臥刺以刺為床。『中阿含』018
「師子經」(大正01 p.442上)

或有沙門梵志裸形無衣。……或住立斷坐或修蹲行或有臥刺以刺為床。『中阿含』104
「優曇婆羅經」(大正01 p.592中)

或有沙門梵志裸形無衣。……或住立斷坐或修蹲行或有臥刺以刺為床。『中阿含』174
「受法經」(大正01 p.712中)

[6-4] 上記のように、釈尊時代の修行者には蹲踞したり、立ったままで坐らなかつたり、棘の上に臥したりする修行方法があったことが知られる。しかしこれは必ずしも螺髻梵志には限定できないし、それが常態であったのではなく、むしろ苦行としての特殊形態であったのではないかと思われる。仏教では横臥しないことが修行の一つとされていないわけではないが⁽¹⁾、坐らないことが尊重されるということはない。

(1) MN.124 ‘Bakkula-s.’ (vol.Ⅲ p.124)、AN.005-021-203~207 (vol.Ⅲ p.248) 参照。

[7] 螺髻梵志は「牟尼」と呼ばれていることもある。

[7-1] 後期聖典資料〈18〉には「牟尼 (muni) とは牟尼と名づけられるアーjeevikā、ニガンタ、螺髻にした者、苦行者である (munināmakā ājīvakā nigaṇṭhā jaṭilā tāpasā)」とされている。

[7-2] ‘muni’ は「寂黙」とか「賢人」と訳される普通名詞であって、「釈迦牟尼」というように、仏教でも用いられる。

[8] 阿闍梨と呼ばれていることもある。

[8-1] これも後期聖典であるが資料〈32〉には「むかしバーラーナシーの都に有名な阿闍梨 (ācariya) があって、500 人の若いバラモンに学問を教えていた」としている。資料紹介の際にも記したことであるが、これが明確に螺髻梵志と示されているわけではないけれども、推定される根拠があるので資料に含めた。〈34〉には弟子たちが集まって阿闍梨の称号を与えたとする。

[8-2] ‘ācariya’ の語源は ā-√car であって「教える」から来ているとされる。したがって ‘ācariya’ は「教師」を意味する。これも普通名詞であって仏教でも用いられることは言うまでもない。